



Title	第三号発刊に寄せて
Author(s)	湯川, 笑子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 2007, 3, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25021
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第三号発刊に寄せて

『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』第三号を発刊できましたことを大変うれしく思います。2003年8月に母語・継承語・バイリンガル教育研究会を発足させ、2005年3月の『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』創刊号より紀要を発刊してまいりました。しかし、正直なところ、毎年紀要を発行したいという強い希望はあっても、経済的に、またマンパワー的に、それが可能であるという見通しが当初あったわけではありません。ですので、第三号まで順調に発刊できたことに、役員一同ことばに尽くせない喜びを感じております。

本研究会は2006年度年次大会（第10回研究会）で丸3年間活動を行ってきたことになり、これを機会に、第二段階へのステップアップとして役員体制の整備を行いました。会の発足当時「発起人」と呼んでいた4人の体制から、その4人を含み、他に企画担当理事とアドバイザーを加えた12人の体制へと拡大、充実いたしました。（詳細については、本号の「2006年 MHB 研究会活動」を参照して下さい。）

それとともに研究会の広報ページも一新いたしました。紀要創刊号を発刊いたします時に、全ての子どもたちに健やかに伸びていってほしいという願いをこめて、特別に依頼し制作した研究会のテーマデザインを、会のホームページにも掲載することができました。おかげさまで本研究会の会員参加申し込み（メーリングリストへの参加申し込み）は年中間断なく届き、今は300名に届こうという勢いで増え続けています。ホームページへのアクセスも、過去2ヶ月だけを見ても7割が国内、残りは世界の多岐にわたる場所から、ピーク時には一日200件を数えるという認知度を示すようになってまいりました。あらためて、この研究会が対象とする研究分野への関心の高さ、言い換えればニーズの緊急度を再認識するとともに、第二ステージに向けて充実した会にしていくことへの責任の重大さを肝に命じている次第です。

さて、本年度の母語・継承語・バイリンガル教育研究会は、リテラシーと「ダブルリミテッド」研究に特化して活動してまいりました。第7回、第9回、第12回の三回にわたって「ダブルリミテッド・一時的セミリンガル現象」を考える研究会を開催し、夏には、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）からの基金提供をうけ、ACCUと本研究会の共催ワークショップを開催し、1週間集中的に多読指導について学ぶ機会を得ました。本年度の年次大会はワークショップの最終日に読みの指導にテーマを合わせ、イマージョンスクールや地域での読みの取り組みについて議論しました。『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』第三号は、こうした本年度の活動の成果を問うという趣旨で、「ダブルリミテッド・一時的セミリンガル現象を考える」というテーマでの一般投稿を呼びかけました。その結果、生田裕子氏、高橋朋子氏、滑川恵理子氏の3本の論考を採用、掲載すること

ができました。3氏のご投稿、編集過程でのご協力にお礼をもうしあげます。今回は様々な理由で採用を見合せたものの、このテーマについての日々の活動や論考をお寄せ下さった方々にもお礼を申し上げます。また、ご多忙の中、第9回研究会に参加下さり、本紀要にも貴重な特別寄稿をお寄せ下さったジム・カミンズ先生にこの場を借りてお礼を申し上げます。

本紀要のテーマの中から「ダブルリミテッド」という概念は、歴史的に遡れば、Hansegård が1962年にラジオ番組で初めて使い、1968年に著書 *Tvåspråkig eller halvspråkig*（「バイリンガルかセミリンガルか」）の中で定義した「セミリンガル」という用語に辿り着きます。この概念は、定義上、また教育的、社会的意義の面から、専門家の中で激しい議論の対象となつた経過もあり、本号では中島和子先生より、テーマの解題が付記されています。その中で、テーマについての説明に加え、4本の論文の内容紹介が記されていますので、各論文の要約についてはそちらをご覧下さい。

最後になりましたが、上記の3回の研究会の企画から本号の編集まで一手に引き受けて、紀要第三号の募集、編集の任にあたつて下さった本研究会会長の中島和子先生に感謝を捧げたいと思います。先生の献身的な活動なしには、本号を世に送り出すことはできなかつたことをここに記し、本紀要が思いを同じくする教育者、研究者、関係者の一助になることを念じて、第三号発刊に寄せることばといたします。

母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会副会長（広報兼任）
湯川笑子
2007年3月